

混成第九旅団の日清戦争（2）

——新出史料の「従軍日誌」に基づいて——

原 田 敬 一

〔抄 録〕

本稿は、新出の史料である「従軍日誌」一編を使用して、「日清戦争」に従軍者がどのように描いているか、を追究した前号掲載論考の続きである。この「従軍日誌」の著者は、混成第九旅団野戦砲兵第五聯隊第三大隊第五中隊に属する将校であり、一八九四年六月六日から翌年二月二十四日まで日記を書き続けた。戦後の清書や刊行物ではなく、現場で書いていた日記と推測される意味でも、所属する部隊も日本が日清戦争開戦前に朝鮮に派兵した最初の部隊の一員であったという意味でも貴重である。参謀

本部が編纂し、刊行した『日清戦史』全八巻には、いくつかの遺漏や改ざんの跡が指摘されており、そうした点も、「従軍日誌」という軍人自身の記述により再検討することができる。前号に六月六日から七月二十六日までを掲載し、今号は七月二十七日から九月十四日（平壤総攻撃前日）までを掲載する。

キーワード 日清戦争、従軍日記、混成第九旅団、砲兵、将校

は じ め に

混成第九旅団の戦争は、いよいよ狭義の「日清戦争」へと移っていく。筆者の部隊は漢城に留守部隊として留まるが、他の部隊は清国軍の各個撃破を目指して、成歎の戦いへと向かう。将校と思われる筆者の関心は戦闘にあるが、参謀本部編による公的な『日清戦史』とは異

なった記述が随所に見られる。『日清戦史』を参照しつつ、「従軍日誌」の記述と状況を分析していくのが本稿の目的である。なお前回の掲載と異なるのは、「従軍日誌」からの引用を上下の野線で囲み明示したこと、地図二葉を付したことである。そのことによって、また論集の枚数規定に触れたため、平壤戦以降は次回への宿題となった。

一 成歆の戦闘

漢城南方の牙山湾に上陸した清国軍は、漢城南部の龍山に展開している日本軍にとって脅威だった。参謀本部編『日清戦史』は、大島義昌混成旅団長の情勢分析、判断として、次のようにまとめている。

清国ノ増加兵ハ已ニ上船シ、別ニ優勢ナル清兵ハ平壤附近ニ集中シ、尋テ南下シ来ルヘキコト遠キニ在ラス。危機目睫ノ間ニ迫リ、今ニシテ彼ヲ制セスンハ我、彼ニ制セラル、ハ数日ヲ出テス、今ヤ混成旅団ハ眼前ノ敵ヲ撃破シ以テ一面ノ敵ニ対セサル可ラサル最後ノ時期ニ達シ転瞬ノ間モ踟躕スルノ猶予ナシ、因テ旅団長ハ韓廷ヨリ依頼ノ有無ニ関セス、先ツ牙山ノ清兵ヲ掃蕩シ、疾速帰還シ、北方ノ清兵ニ備フルノ猶予ヲ得ンカ為メ二十五日出発南下スルコトニ決セリ（『日清戦史』第一卷一二六頁）

旅団の主力は、七月二五日午前一〇時に駐屯地である龍山を出発した。この南下には、食糧や弾薬などを運ぶ部隊がついていた。正規の軍人である輜重卒・輜重輪卒のほか「数多ノ軍夫、韓人夫並ニ韓地徴発ノ牛馬多数ヲ混セリ」（同第一卷一三〇頁）と、朝鮮で募集した日本人（居留地の住民）と朝鮮人の「軍夫」、徴発した牛馬がその編成だった。ところが二五日から二六日にかけて、朝鮮人軍夫と馬が多数逃亡してしまう。「徴発ノ朝鮮人馬行軍ノ苦惱ニ懲リ概ネ歩兵第二十一聯隊第三大隊及野戦病院ハ一二頭ヲ余シ其他悉皆」（へ）内は原文では二行割。同一三一〜一三二頁）という状況となった。歩兵第二十一聯隊第三大隊は前衛部隊の基幹として二五日早朝に出発して

いた。各部隊の最初の集結地は水原と決められている。前衛部隊が水原に到着するまでに前述した逃亡事件が起こり、二六日は再度朝鮮人軍夫や馬を集めなおしたが、再び「皆逃亡シテ遂ニ翌日ノ出発ニ支障ヲ生シ」（同一三二頁）のため、第三大隊長古志正綱は「二十七日午前五時責ヲ引キ自尽スルニ至レリ」（同）と自決した。

旅団主力は二七日から「戦備行軍ニ移リ」（同）、振威に到着、露営となった。漢城などに残った部隊も、北方からの清国軍侵入に備えるだけでなく、情報戦も展開していた。「従軍日誌」二七日（金曜）の条によれば、日本軍主力は釜山浦等に上陸し、南方から牙山を包囲する作戦であるかのように「流言」を流させている。同日、七原付近での騎兵の衝突という記述は、『日清戦史』第一卷一三二頁にも記録されており、二六日午後四時三〇分に七原南方一キロの時点で起きた、とあり、日付は筆者の誤記だが、駄馬一頭捕獲、という情報は『日清戦史』にはなく、新情報である。

七月廿七日 雨天

亦通弁人ヲ以テ左ノ流言ヲ放タシム／我軍ノ大部分ハ馬山浦及釜山浦ニ上陸シ金州公州ヲ経テ牙山ヲ取巻キ然ル後ニ清軍ニ談判ヲ為ス所アラントス云々

本日命令 的ハ「消し…満」征韓役附近并ニ上土橋附近ニアリ、其首力ノ所在詳カナラズ

此日我騎兵ハ七原附近ニ於テ敵ノ騎兵ヲ撃退シ駄馬一頭ヲ奪ヘリ二八日（土曜）は、南進している旅団主力の敵情視察段階で、成歆の戦闘の前日となる。留守部隊である著者にも、おおまかな前進経路

は説明されていたようで、水原府―振威県―素砂城（注…素沙場の誤り。地名の誤記はしばしば見られる。その検討は後述）―成歆・牙山と記している。

七月廿八日 晴天

成歆駅方向ヲ通視スルニ三ヶ所ノ幕営ヲ視ル、牙山ニ向テ前進セシモノハ水源府振威県素砂城ヲ経テ成歆牙山ニ着スル筈ナリ

野戦砲兵第五聯隊第三大隊は漢城の南西（日本公使館から約四キロ）の万里倉附近の高地・溪谷に兵営を構えていたが、著者の部隊である第五中隊は漢城防衛の留守部隊であり、成歆攻撃の当日である二九日明け方に兵営を出て、より漢城に近づいた阿峴まで進出した。漢城守備隊長の一戸少佐の指揮下に入っているから、成歆攻撃で漢城にもその余波があると判断していたのかもしれない。

成歆攻撃戦は七月二九日（日曜）の夜明け前に始まった。「従軍日誌」の書き方では、二九日当日に攻撃戦の様子が伝えられたと思われる。『日清戦史』によると、攻撃は二方向から行われた。成歆駅方向から進み、牽制役となった右翼隊（歩兵第二一聯隊の二個大隊、騎兵五騎、工兵第五大隊第一中隊）、旅団長が直接指揮をとって主力となった左翼隊（歩兵第一一聯隊の二個大隊、騎兵五騎、砲兵团Ⅱ野戦砲兵第五聯隊第三大隊と歩兵一個中隊、予備隊Ⅱ歩兵一個大隊）である。まず左翼隊が幕営地の素沙場を二九日午前〇時に出発し、右翼隊は二時間後に同じく素沙場を出発した。天気は悪く、道路は泥濘と化し、行軍は難航した。「是夜陰雨晦冥咫尺ヲ弁セス、加フルニ道路泥濘ニシテ間々脚ヲ没シ、路幅狭小路面粗悪ニシテ往々或ハ水田ニ陥

リ、先頭或ハ岐路ニ迷ヒ、後者或ハ連繫ヲ失フ等隊間ノ断続スルコト数回ニシテ行進渋滞シ」た（『日清戦史』第一卷一四〇頁）。そのため、左翼隊が目的地である都監里付近に到着したのは、夜も明けようとする午前五時一〇分となった。牽制するために主要道である全州街道を進んだ右翼隊は、「時適々満潮ニ際シ、殊ニ河川、沼沢多クハ氾濫シ、為メニ道路ト水田トヲ弁別スル能ハス、行進極メテ困難ナリ」（同一四〇～一四一頁）。午前三時二〇分右翼隊の前衛隊（歩兵第二一聯隊第一二中隊）が佳龍里付近で射撃され、中隊長松崎直臣歩兵大尉が戦死した。この攻撃に反撃するため、待伏せ隊の左翼に迂回するため水濠に入った時山襲撃歩兵中尉ら二三名が「此濠固ト水多ク且ツ河床泥深ク遂ニ進退ノ自由ヲ失ヒ」溺死する（同一四一頁）。

午前六時過ぎ、歩兵第一一聯隊第二大隊と砲兵团が、清国軍の展開する罌粟坊主山への攻撃を開始する（同一四三頁）。激戦が続き、罌粟坊主山から月峰山に展開していた清国軍が撤退した後、北方の幕営地に日本軍が突撃したのは午前七時四〇分頃で、この時点で戦闘は終了した（同一五二頁）。「従軍日記」では「我ノ百発以上ヲ発射」した、とするが、『日清戦史』第一卷「附録第十五 明治二十七年七月二十九日 混成旅団費消彈藥表」によると、

歩兵第十一聯隊	銃弾	三六、八二一
歩兵第二十一聯隊	銃弾	三〇、九八〇
砲兵第五聯隊第五中隊	榴弾	一七
同 第六中隊	榴弾	四六
	榴霰弾	一一一
	霰弾	〇

と記録され、砲兵团は榴弾六三発、榴霰弾一九一発、合計二五四発を

費消した。散開する歩兵線には空中で拡散破裂する榴霰弾が有効で、塹壕などの陣地破壊には着地破裂する榴弾を使用したのだらう。日清戦争全体を通じて砲兵と使用砲弾の検討は重要であり、前掲拙著でも細かく検討している。

七月廿九日 雨

午前四時幕営地ヲ発シ式番丁ニ集合、一戸少佐ノ指揮ヲ受ケ阿峴ニ滞在ス

牙山ノ報ニ曰ク 午前〇時三十分ヨリ細路ヲ前進スルニ三時頃本道ノ二ヶ所ニ於テ銃声起リ甚タ激烈ナリ／午前五時二十分城山ニ砲列ヲ布キ敵ノ歩兵ニ対シ射撃ヲ始メシカ敵ハ退却スルヲ以テ之レヲ追撃シテ之レヲ破ル／午前六時八分月峰山ノ敵ニ応射セリ、我隊ハ迅速射撃ヲ行ヒシニ好距離ニ破裂スルヲ以テ悉ク我歩兵ハ喝采ヲナシ全軍ノ志気甚熾ナリ、敵モ熾シニ発射セルモ既ニ我ノ百発以上ヲ発射シタレハ敵ハ漸次退却ヲ始ム／我第三陣地ニ進シトキ歩兵未タ前方ニ在ラザリシカ其前進ヲ終リ月峰山ニ在ル敵ヲ追撃スルニ彼レ悉敗走シテ其跡ヲ見サルニ至ル／午前八時敵ハ全ク退却シタルヲ以テ射撃ヲ止メタリ

漢城留守部隊の任務は、平壤に展開する清国軍が南下して、漢城を攻撃した場合の防備なので、七月三〇日漢城北方の臨津江にある塩津鎮に偵察隊を出したが、清国軍の南下は認められなかった。「従軍日誌」三〇日（月曜）条にある村木少佐の情報（仁川から龍山駐屯地への電報だろう）は、二九日の成歙戦闘に高雄・愛宕・ほか一艘の軍艦三隻が参加する予定だと伝えている。実際には軍艦の戦闘への参加は

なかった。『日清戦史』第一巻は、「伊東司令長官ハ（中略）海戦ノ景況ヲ大島公使及混成旅団長ニ通報セシメ、其復命ニ依リ混成旅団ノ南進及其糧秣追送ノ困難ナルヲ知り、之ニ声援シ且ツ其糧秣ノ海運ニ便宜ヲ与ヘント欲シ、高雄、赤城、愛宕ヲ牙山及仁川ニ派遣シタリ、此三艦中愛宕ハ糧食輸送ノ護衛ニ当ランカ為メ仁川港ニ向ヒ、高雄、赤城ハ牙山錨地ニ到リヘ二十九日〆偵察スル所アリシモ、彼我ノ軍隊ヲ認メス、攻撃方面ノ変更セラレタルモノト判断シヘ高雄艦長ハ始ヨリ清兵ノ成歙ニ移レルヲ知ラス、従テ混成旅団ハ牙山ニ戦ヒツ、在ルモノト信シ在リシナリ」赤城ト共ニ仁川港ニ向ヒ途中愛宕ノ糧食運送船ヲ護衛シ来ルニ会シ又之ヲ伴ヒ午後八時三十分仁川港ニ到リ」（一六九頁）と、海軍と陸軍の意志疎通が不十分だったと記録している。無線通信が実用化されていない段階での戦争だった。

二九日早朝に成歙攻撃を終了した混成旅団主力は、敗走した清国軍はまだ牙山にいるものと推定し、同日午前九時二〇分から同一〇時三〇分までに全員を牙山に進攻させる。部隊は午後三時前後に牙山に入るが、清国軍は撤退した後で、兵器や糧食を押さえた後、牙山に露営した（『日清戦史』第一巻一五四～一五五頁）。二九日に牙山を占領した、という情報は、漢城の部隊に三〇日に届いている。「一昨日」では二八日になるので、成歙の戦闘と間違えているのかも知れない。先に指摘した海軍の牙山戦闘に参加する計画は、「村木少佐ヨリ情報」として「従軍日誌」に記録された。二五日の「豊島沖輸送船団撃滅作戦」（『日清戦史』では「豊島海戦」）で沈められた高陞号のトーマス・ライタル・ガルスワースイー船長からの情報で、一一〇〇

人の増派部隊を撃沈したことを確認している。高陞号が輸送する増派部隊（野砲一三門を含む）が成歙の清国軍に加わっていれば、歩兵五二〇〇人、野砲二一門となり、攻撃する混成旅団の歩兵三〇〇〇人、騎兵四七騎、野砲八門を優に上回るのので、「従テ勝敗ノ数未タ遽カニ判ス可カラサルモノアリシナラン」（一五八頁）と『日清戦史』第一巻が率直に認めている。ここからも、「豊島海戦」ではなく、「豊島沖輸送船団撃滅作戦」と名称変更しなければならない（拙著『日清戦争』吉川弘文館、二〇〇八年）。

七月三十日 晴

我偵察隊ハ塩津鎮ニ至ルモ敵ヲ見ス、一昨日牙山ニ於テ勝利ヲ得タリトノ事

村木少佐ヨリ情報七月廿九日午前十時三十分仁川発

軍艦高雄外一艘ハ今朝牙山ニ着キ亦愛宕ハ仁川ニテ石炭積入次第

牙山ニ向ヒ陸戦ニ応射スル筈ナリ

伊藤司令長官ヨリ大島少将ヘ電報廿八日午前九時発

沈没シタル清国輸送船長ノ言ニ拠レハ支那ハ七月廿二日運送船七

艘ニ陸兵六千二百人ヲ乗セ太沽ヲ出発シ義州方向ニ向フ、蓋シ大

同江ナラン／今日亦英國商船ノ旗ヲ立テタル運送船三艘ニ陸兵

三千三百人ヲ乗セテ共ニ太沽ヲ出発セリ、此内一千百人ヲ乗セタ

ル一艘ハ今回牙山沖ニテ撃沈メラレタリ

二 成歙戦闘後

成歙と牙山で戦利品があり、歩兵部隊によって漢城へ運んだことは、『日清戦史』第一巻一五六頁に記されているが、内容まではわからない。「従軍日誌」では「大砲八門小銃八十二軍旗沢山」と書いている。こうした戦利品は、日本に送られ、各地の学校や社寺に分配された。死傷者の数を両軍ともに記録している。清国軍の戦死者五〇〇人というのは、『日清戦史』第一巻一五八頁の「此ノ戦闘ニ於ケル清軍ノ死傷ハ五百ヲ下ラス」に対応し、「我死傷者九十五名」は同じく「我軍ノ死傷將校以下八十二名」に対応した記述である。旅団主力は八月五日午前八時半漢江を渡河し、龍山に帰營する。「従軍日誌」三日（火曜）条に「八月四日帰幕ノ筈」とあるので、一日遅れたようだ。この年の朝鮮半島は「暑氣酷烈」（同第一巻一五六頁）で日中の行軍を避け、夕方の行軍に切り替えた影響かも知れない。

七月三十一日 晴天

牙山ニ前進セシ軍隊清兵ヲ撃退シ捕虜分捕多ク大砲八門小銃

八十二軍旗沢山、我死傷者九十五名敵兵五百人ヲ殺セリ、歸路平

沢振威県ヲ經テ来ル八月四日帰幕ノ筈

此日中隊ハ武裝検査ヲ行フ、蓋シ中隊附通弁田中某金拾円余ヲ紛

失シ其行衛不明ヨリ各人ニ付ニ探索シタルナラン

兵營を出て仮駐屯地である陵峴に在る間に、部隊では事件が起きた。中隊付きの通訳である田中某の所持金一〇円が行方不明になり、三十一日に「武裝検査」の名目で兵士たちの所持品検査が行われた。その結

果窃取した犯人が見つかり、仮営倉に入れられた。おそらく軍法会議に掛けられただろう。

八月一日 晴天

午前七時ヨリ陵峴ノ元モ幕营地ニ帰ル

此日前日紛失セシ田中通弁ノ金円ハ石原清治窃取シタル者ナルコト分明シ仮営倉中

八月二日（木曜）の「寒暖計百十五度」は華氏で、摂氏では四八・三度となる。相当な暑さである。酷暑の中、既舎修繕作業が命じられた。

八月二日 晴天 寒暖計百十五度

既舎破損ニ付修繕ス

八月三日（金曜）も晴れたので、おそらく酷暑は続いただろう。早朝には呼集がかけられ、砲の照準法について演習が実施された。平壤からの清国軍来襲という危険性は少なくなったと判断したのか、著者の砲兵中隊には、牙山から帰還する部隊への糧食供給のため、翌四日午前三時に出発するよう命じられた。

八月三日 晴天

午前七時三十分呼集照準法演習

明四日三時ノ出発ニテ牙山ノ帰兵補充ノ為メ二度分ノ糧食携帯出張ノ旨命令アリタリ

四日（土曜）には、前日の命令通り、午前三時に呼集がかけられ、予備駄馬三〇頭と砲兵隊の兵士に砲兵輪卒を加えて二七人の臨時編成部隊で出発する。午前八時には漢江南一〇^{キロ}の森林に到着しているの

で、六時頃には漢江を渡河したのだろう。

森林の地名は記録されないが、『日清戦史』によれば「果川」と思われる（第一巻一五七頁）。『日清戦史』第一巻に付されている附図第二「混成旅団ノ南進及作戰地一覽図」（二〇万分一）によれば、漢江を南に渡ってすぐの銅雀洞から約一〇^{キロ}の地点は果川県の南三^{キロ}にあたる。市街地を離れており、露営しかないと思われる地形である。留守部隊が到達した三時間後の午前一時には帰還部隊がこの森林に到着し、糧食の供給を受けた上で、同地にいったん露営した。

八月四日 時々雨

前日命令通り午前二時三十分起床三時呼集予備駄馬三十頭砲兵及輪卒共二十七人牙山ノ方行^マニ前進、曉漢江ヲ渡リ午前八時全江ヲ離ル、二里半ノ処ニ至リ森林中ニ休息ス、全十一時頃牙山ヨリ各兵帰營全地ニ露営ヲナス

四日の「従軍日誌」には、「露営」と書かれていたのだが、やはり昼間の酷暑を避けての大休止だったのだろう。八月五日（日曜）の夜中に起床ラッパが鳴り、午前一時半には露营地を出発して、龍山近くの駐屯地に向けて行軍となった。馬に水をやりつつ漢江に向かい、渡船場から部隊は渡河していった。『日清戦史』では、午前一時果川出発、同四時半銅雀津に到着した、とある（第一巻一五七頁）。四時間後の午前八時半、全部隊が渡河を終わり、龍山に向かった。その途上で凱旋式が行われた。『日清戦史』では七二字の記述だが（同）、「従軍日誌」は約五倍の字数を費やして記録している。この凱旋式という事態から、著者は「外奴ヲシテ仰羨敬慕ノ間」と朝鮮人の歓迎を受け

たと認識するが、それを見ていたのは日本人居留民と西洋人数人に過ぎなかった。勅使として参加した「朝鮮国大守朝義淵」は趙義淵の誤記で、彼はその後も親日派として活動を続ける。おそらく日本公使館の企画で凱旋式が設定され、朝鮮国王の勅使も派遣されるよう求められたのだろう。日本軍は「勝利」に酔っているが、朝鮮人や朝鮮政府はまだ戦争の帰趨を疑っていた。思わず涙を流した著者の思いは、「勇奮」だけではなく、不安もあったのではないか。

八月五日 晴天

午前〇時三十分起床 一時三十分出立、幕営地ニ向テ帰営、漢江ヲ離ル十五六町斗リノ処ニテ天明リ小休止ヲ行ヒ馬匹ノ水飼ヲナス、亦行進ヲ起シ全江ニ至ル、兼而日本兵站部設置ノ渡船場ニ至リ人夫ノ助力ヲ得テ馬匹及材料ヲ渡船ス

明ニ前方ヲ望メハ三個ノ天幕ヲ張り凱旋軍隊万歳大日本帝国軍隊歓迎候哉等ト書、レタル諸旗ヲ風ニ翻ヘシ余等ヲ迎フ、既ニシテ全所ニ至レバ氷酒及飯飯等ヲ寄贈シ優待セリ

而シテ露梁街道ニ至レバ分捕ノ旗ヲ立テ鐘ヲ鳴ラシテ我軍ノ先登ニ立チ各隊集合スルニ及ンデ歩騎砲工輜重衛生隊ト秩序ニ整列シ大島公使ハ 天皇陛下万歳ヲ呼ハレ各隊之レニ和ス、亦朝鮮国大守朝義淵ハ勅使トシテ来リ会シ日本軍隊万歳ヲ唱ヘ我旅団長大島少将モ亦朝鮮国王大君主万歳ヲ唱ヘラル、各隊之レニ和ス、終テ軍樂隊ハ君ガ代ヲ奏シ終リテ其順序ニ依リ行進ヲ起ス、蓋シ成歓駅ニ於テ奪取セシ軍旗數十流ヲ立テ分捕大砲ヲ牛ニ牽カシメ我軍秩序ニ依リ軍樂隊ノ樂ニ和シ整々堂々外奴ヲシテ仰羨敬慕ノ間ニ

幕営ニ歸ル、但シ本日此ニ集合セシモノハ日本人居留ノ人民ト西洋人三四ノ新聞記者其他ハ公使館文官巡查等ナリノ是ノ時ニ当リ余等其壯途ニ感シ勇奮落涙不覚涙ト称ス

八月六日（月曜）も摂氏三七・八度と暑かったが、将校らは日本公使館で凱旋の祝宴に参加している。

八月六日 晴天 百度

我軍隊ハ各将校並ニ相当官ハ公使館ニ集合酒宴ヲ開ク

三 平壤戦への準備

八月七日（火曜）は天候の記述だけで、本文は空白である。翌八日（水曜）は、開戦宣告があったと記すが、八月二日付官報に掲載された「宣戦詔勅」が、前線の部隊に伝宣されたのがこの八日だったということだろう。

「一週間内」に平壤へ向けて出発する、とこの時命じられている。平壤戦への準備はすでに始まっていた。「六月下旬平壤方向ニ派遣」された平田時丸歩兵中尉（町口中尉の平壤着後、七月一九日平壤を出発した）、七月上旬に同じく派遣された町口熊槌歩兵中尉（七月一三日平壤に到着）の二人の将校斥候派遣からである（『日清戦史』第二巻一頁）。次いで、七月二三日竹内英男騎兵少尉ら騎兵一五名を、開城・平山・鳳山での通騎哨（情勢を騎兵によって連絡する拠点）設置と町口中尉（七月下旬平壤を離れ中和に移動）との連絡に派遣する（同）。八月上旬には、中和の「韓民ノ反抗」が強まったため、町

口と竹内らはさらに黄州に後退して情報収集に努めた。臨津鎮独立支隊は、八月六日漢城と開城間の電信を開設する（同二頁）。町口・竹内偵察隊を援護するため、八日朝「二戸少佐ノ隊」を派遣する。これは歩兵第一一聯隊第一大隊（第一・四中隊）で、一二日に開城に到着し、騎兵一〇余騎の遙騎哨を撤収して、一四日平山に後退する（同三頁）。一九日には平山西北約一四^{キロ}の葱秀に前進して偵察拠点とする（同）。平壤戦へ向けての兵力増強のため、釜山・元山駐屯の各部隊も漢城へ集合するよう命令が出ていた（同五頁）。『従軍日誌』には、歩兵第一二聯隊第一大隊のみが記録されている。

八月七日 晴天

八月八日 晴天

此日大日本帝国ハ清国ト開戦ス可キ宣告ノ命令アリタリ、此日ノ命令ニ曰ク敵ハ平壤ニ来ル、一週間内之レニ向テ出発ス／今朝一戸少佐ノ隊ヲ平壤ニ向テ分遣シタリ、其任務ハ第一義州及大全江ヨリ来ル敵ヲ通知スルコト第二京城安寧ヲ保ツコト第三打漏ノ敵兵其方行ニ通ケ来ルヲ打取ルコト／歩兵第十二聯隊第一大隊ハ混成旅団ニ合スル為メ去ル四日釜山ヲ出発セリ

九日（木曜）には夜間行軍、一〇日（金曜）は早朝行軍と、時間帯を変えての行軍だけの訓練で過ごした。土曜日の一一日の本文記述はなく、一二日は日曜だが、駄馬鞍の修理状況を点検するなど、次の戦闘への準備に追われている。

八月九日 晴天

此日夜行軍ヲ以テ京城附近ヘ行軍ス

八月十日 晴天

午前二時起床三時呼集迎恩門ニ向テ行軍ス、全六時三十分帰營ス

八月十一日 晴天

八月十二日 晴天 午前七時ヨリ少雨降ル

前日修理セシ駄馬鞍ノ結果ヲ実見ス

一三日（月曜）は午前中に露梁街道に出て、成歙・牙山で捕獲した分捕砲の使用状況を確認するための実弾射撃を行った。『従軍日誌』七月三一日条には、大砲八門の戦利品が記録されていたが、そのほかに電信材料も戦利品で活用され、通信網の整備にあてられている（『日清戦史』第二巻五頁）。一四日（火曜）の本文記述はなかった。

八月十三日 晴天

午前七時三十分呼集、露梁ニ於テ分捕砲ノ実弾射撃ヲナス

八月十四日 晴天

一五日（火曜）と一六日（水曜）は、夜間行軍と馬の訓練で過ごす。相変わらず酷暑が続き、日射病の兵士が続出している。日射病が続出していても、戦闘準備や訓練などが進められていった。

八月十五日 晴天

午前二時起床三時出発露梁ニ至リ夜行軍ヲナス七時帰營

近日来炎暑甚シク日射病ヲ起ス者最モ多シ

八月十六日 晴天

午前七時三十分呼集、駄馬法

四 平壤戦へ

「豊島海戦」の捷報が大本営に届いたのは七月二十九日。大本営は捷報を受けて、陸戦の大展開を決定する。翌三〇日野津道貫第五師団長へ「作戰大方針」を示し、師団残部の渡韓を打電・命令した。三十一日一箇大隊を釜山へ、八月一日さらに一箇大隊を元山へ、先発させる（第二巻九頁）。その後どこへ上陸するのが安全で早いかについて、大本営と第五師団司令部でやりとりがあったが、結局歩兵一箇大隊と野砲兵一箇大隊を元山へ、残りの部隊は釜山へ送ることと最終決定となった。第五師団司令部と歩兵一箇聯隊など（第三次輸送部隊になる）は、八月二日から二九日の間に龍山付近に到着する（第二巻一一頁）。第一〇旅団（立見尚文少将）は第四次輸送部隊になり、二一日仁川港、二三日から二四日に龍山に到着する。これら第五師団主力を待つことなく、第九混成旅団は北進を開始していた。

八月一七日（木曜）に先発隊が出発した。「従軍日誌」の「臨時分捕」とは、戦利品の大量によって「臨時分捕砲小隊」（武器は成獣の戦鬨で鹵獲した山砲二門、兵員は野砲兵第五聯隊第三大隊の予備砲手、材料の運搬は牛と『日清戦史』第二巻四六頁で説明されている。正規の砲兵小隊の定数は砲二門）が組織され、先発隊に加わったことを示している。分捕砲の試用は、一三日に済んでいる。分捕砲（一、二門）と第五・第六中隊の弾薬段列（弾薬補給のための中隊）が、この日船で輸送となった。

— 八月十七日 晴天 —

午前臨時分捕出立ニ付其材料及第五第六中隊ノ第二段列弾薬ヲ船便ニ託シ運送ス、但シ分捕砲小隊ハ乗船前進ノ筈

一八日（金曜）には、出発を前にして、石黒忠恵野戦衛生長官は、各地の赤十字社から陸軍広島予備病院へ熟練看護婦が派遣されることになった、と伝え、これは赤十字社の名誉総裁である皇后の配慮によると強調した。天皇の軍隊が天皇の命によって出征し、戦い、負傷すれば、内地へ還送された兵士たちを手厚く看護する準備はできた、という意味でもある。日清戦争では、赤十字社の看護婦は戦場へは派遣されず、国内の病院勤務で兵士たちの看護に従事した。

八月十八日 晴天

石黒軍医正衛生長官ヨリノ通知左ノ如シ

我皇后陛下ハ熟練ノ看護婦等ヲ若干名赤十字社ヨリ広島予備病院へ送ラル、尚患者ニ懇篤ナル治療ヲ施セトノ御思召ニシテ其優握ナル思召ノ程感シ入ルナリト

一九日（土曜）には、日給のうち一六錢分を朝鮮の一〇〇文に替えて、残りの日給と合わせて支給した。これは翌日の兵営地出発に備え、行軍中の支払いに充てることを想定した朝鮮銭支給だった。命令は、翌二〇日歩兵第一聯隊第一大隊に野砲兵第五中隊を加えて前衛とし、前進せよ、というものだった。一七日の分捕砲小隊と弾薬段列の船便出発と一九日の出発命令は、混成第九旅団の前進計画に基づきなされている。

『日清戦史』第二巻の当該時期は、「第九章 平壤戦前日本軍ノ行動」中「五 平壤攻撃ノ為メ集中前進」（二六〇九七頁）にまとめら

れているが、中心は野津道貫第五師団長である。それによれば、八月一九日漢城に到着した野津師団長は、大島混成第九旅団長らから平壤の情報を聞き取った。平壤の清国兵は「多クモ一万四五千ニ過キサルヘシ」との情報と、大院君以下の朝鮮政府が平壤に大兵が集合中と聞き「事大ノ念」を再起して「我国ニ信頼スルヲ危シトスルノ状アルヲ見」て、後者の状況打破を目的に、野津らは第五師団のみによる速攻を、この日決断した（二六―二七頁）。すでに八月一四日大本営は、第三師団の増派を決定していたが、その到着を待たずに平壤攻撃をするというのが、第五師団司令部の決定である。漢城の政治情勢打破というのは、大島圭介公使ら外交官からの要求かも知れない。第五師団のみによる速攻は、師団司令部の判断ではあるが、混成第九旅団、とくに大島旅団長の積極性が作用したのではないか。「従軍日誌」の八月一七日程や一九日程に現れているように、第九旅団の部隊は平壤への前進を準備したり、開始したりしているのである。

第五師団司令部は、一九日に①混成第九旅団を義州街道から進め正面にあてる、②朔寧分遣支隊（歩兵第二聯隊の一箇大隊を基幹に、工兵一箇小隊、電信隊支部を加える）に元山上陸各隊（歩兵第一二聯隊の一箇大隊、野戦砲兵第五聯隊本部と第一中隊）を加えて朔寧支隊とし、平壤に東方面から迫る、③師団主力は平壤の背後に回り退路を断つ、という作戰命令を発す（第二卷二七頁）。

八月十九日 曇天

此日韓錢百文ヲ拾六錢トシ日給ヲ差引各兵ニ日給ト共ニ渡ス

明日第五中隊ヲ前營トシ一戸少佐ノ指揮ヲ受ケ平壤ニ向テ前進ノ

一 答

第五師団の一九日作戰命令ではなく、それ以前の混成第九旅団命令により、筆者の野砲兵第五中隊は、八月二〇日（日曜）臨津江へ行軍を開始する。前衛部隊ではなく、旅団主力の一部隊としての行軍である。したがって筆者の行軍行程は、旅団主力と同じ筈である。同行している他の部隊の記述はほとんどないため、特に記しておく。第五中隊は夜半に起床し、午前四時には兵營を出発した。一〇時間後に到着した高陽は龍山から約三〇^キ北北西にある都市である。川の畔で露営したが夜半から降雨が激しくなった。

八月二十日 雨

午前二時三十分起床四時出発北進午後二時高揚郡^マニ着、河傍ニ於テ露営ヲナス／露営中夜半ヨリ降雨甚シク全身雨ニ湿フ

二二日（月曜）は、午前二時に起床し、午前四時から午後三時までに一時間かけて、露营地高陽からさらに約三〇^キ北北西にある臨津鎮に着く。野砲兵第三中隊の幕营地は臨津江の手前の山上だが、樹木も少なく酷暑を防ぐことはなかった。夜半に起床して夜明け前に行軍を始めるのは、この酷暑対策だろう。二二日（火曜）も臨津鎮近くの幕营地にとどまった。

八月二十一日 晴天

午前二時起床四時出発午後三時臨津港ニ着ス、当地ハ有名ナル要地ニシテ旧小西行長ノ征韓ノトキノ名戦場ナリ／我幕营地ハ河ヲ距ツルコト約五百米突前ニ在ル山上ニテ樹木少ナク暑氣一層ヲ感ス

八月二十二日 晴天 暑氣甚シ

当地ニ於テ滞在

二三日（水曜）にようやく幕営地を出発し、梨川店に到着した。この日の行程は短い。そろそろ糧食が不足になり始め、調達をしながら行軍したからかも知れない。九月にはいると各隊は糧食調達が不可欠になる。ここがこの日の露営地である。炊事場の設置が本隊から離れたところになったので、兵士たちは困ったようだ。筆者たち先発隊の第五中隊を追及していた第六中隊と第三大隊本部が、この日合流する。

八月二十三日 晴天

此日露営地出発午後梨川店着、此日炊事場本隊ヲ離ル、三十米突ノ地ニ設置各兵困難／本日第六中隊及大隊本部到着

二四日（木曜）午前六時梨川店を出発、午後三時には開城府に到着した。行程八里（約三二^キ）と司令部は言うが、一〇里（四〇^キ）以上あったのではないかと愚痴をこぼしている。前日の行軍が短かった分、この日は強行軍だったようである。露営地はあいかわらず山林の中だった。開城府には、葱秀まで前進していた歩兵第一聯隊の第一大隊（二戸大隊）が二二日に戻ってきていた。二四日は混成第九旅団がすべて開城に集結し終わった日となった。

八月二十四日 晴天 午後少雨

午前四時起床六時出発午後三時旧王城ナル開城府ニ着營、府ハ旧王居ノ地トシテ戸数一万余四方ニ柵ヲ設ケ当国第二ノ首府タリ／本日行里程八里ト雖モ十里ノ余アリ、到着後直チニ山腹緩傾斜面ノ栗木中ニ露營ス

開城府は、漢城―平壤間の義州街道入り口とも言うべき位置にあり、平壤まで約一五〇^キの距離だった。予想される前線からはよほど遠いわけで、大都会開城府を活用して、兵士の休養や糧食の調達などが二五日（金曜）と二六日（土曜）の二日間続けられた。

八月廿五日 晴天

午前当府城牆外二百米突ノ西北方山腹ニ天幕ヲ張り幕營トナシ兵力休養ヲ斗ル

二六日（土曜）には明日出発の命令が出たが、翌二七日（日曜）に取消になり、「未曾有ノ兵力休養」になった。酷暑の行軍を続けてきた兵士だけでなく、下士官や将校もほっとしただろう。出発できなかったのは、糧食問題だった。「諸物品及飲食物ノ購求」が行われている。

八月廿六日 晴天

幕営地ニ於テ滞在、兵力休養、明日出発ノ旨命令アリタリ

八月廿七日 晴天

本日出発予定ノ処見合／当地ハ繁榮ノ地ニシテ諸物品及飲食物ノ購求ニ便、出発以來未曾有ノ兵力休養ヲ成ス

二八日（月曜）部隊は午前五時に出發し、午後四時金川郡に到着、山上に露營する。金川郡は開城府の北北西約三〇^キ。この日はうってかわって「大雨大雷」となった。なかなか寝付かれない上に、深夜にも大雨が降り、全身びしょ濡れになる。

八月廿八日 大雨大雷

午前三時三十分起床五時出発金川郡ニ向テ前進午後四時到着山上

ニ露營ヲナス／此日行軍中大降雨行進甚タ困難ス、道路上流水小河ノ如ク露營地ニ到着スルモ山上ハ泥濘ノ足ヲ運ブニ困シム、而シテ野ニ寝藁ナク生葦ヲ集メ睡ニ付クモ地ニ附キタル半身ハ直チニ湿潤為メニ寝ニ附ク不能深夜亦大降雨終ニ上部モ半身モ湿潤携帶ノ荷物ハ全ク水中ヨリ揚クルカ如シ

大雨は二八日、二九日と二日間続き、橋の崩落や「河川ノ張溢」（第二卷三〇頁）のため、混成第九旅団ほとんどが金川郡に足止めとなった。テントを張つての露營も不可能で、「金陵館」での舎営に移る。第五中隊の炊事場は橋の崩落の前に渡っていたが、本隊は残されたため、各自自炊を余儀なくされた。

八月廿九日 大雨

午前出発用意中楮灘川出水橋梁随落為メニ前進スル不能終露營ヲ金陵館ニ移シ舎営／而シテ当隊ノ炊事場橋梁随落前通過シタルニ本隊ハ之レ続行スルヲ不得依而各隊自炊／前日来降雨ノ為メ全身湿潤之レヲ乾カスニ法ナク終日潤衣ヲ着ス

大雨による出水は三〇日（水曜）も続き、二八日以来三日間の金川郡足止めとなる。偵察隊によって朝鮮人三名が清国軍へ火薬輸送中を捕らえ、一名を殺害して二名を馬一〇〇頭の徴発作業に従事させた。

八月三十日 晴

昨日来出水ノ為メ滞在／韓人カ敵ヘ通シ火薬ヲ運送スルヲ我偵察隊ハ捕ヘ来リ、其一名ヲ殺シ他ノ二人ヲ生シ馬匹一百頭ヲ徴発セシム

ようやく三二日（木曜）金川郡を出発し、平山に向かう。平山は、

金川北北西約一二_ロの町で、一戸大隊が確保していた葱秀と金川の間地点にあたる。雨の中、険しい山道を経て、行軍五時間半で平山に到着し、民家を確保して舎営とした。仁川以来幕営が続いていたので、初めて舎営となった、という感想を綴っている。平山にも八月三一日から九月二日まで三日間とどまることになる。『日清戦史』第二巻では「河川ノ張溢ノ為メ金川ニ滞留ヘ二日間」（三〇頁）とあるが、三日間滞留の部隊もあったことが、『日清戦史』編纂者には見落とされたようである。

八月三十一日 雨

午前五時三十分起床七時三十分出発平山ニ向テ前進午後一時到着民家ニ入り舎営仁川出発以来舎営ヲ成ス之レヲ始メトス／此日一大險悪ナル山路アリテ且ツ雨天ニ抛リ行進ニ困難ス

九月一日 晴天

此日平山ニ於テ滞在兵力休養ヲ斗ル

九月二日（土曜）は平山滞在最終日となったが、一戸前衛司令官から、奉軍騎兵を撃退し、香州府を占領した、という朗報が届く。『日清戦史』添付の地図を検討したが、「香州府」という地名は見あたらない。同音の「黃州府」は義州街道にあるが、そこは筆者たちの部隊が滞留している平山から約七〇_ロ西北で、混成第九旅団主力が到着するのは九月七日である（第二卷三三頁）。平壤攻略戦は、糧食確保の点で問題点を持っており、行軍の速度は糧食確保作業と並行している。『日清戦史』では、葱秀に駐屯する一戸大隊に騎兵一分隊、臨時に編成した糧食一縦列を加えて、瑞興まで「糧食駄馱ヲ徴集セシムル

タメ」(第二卷三八頁) 九月二日に出発させているので、この情報の「香州府」が不明である。

九月二日 晴天

本日モ当地ニ滞在／午後一時着我前營司令官一戸少佐ヨリノ報セ如シ我前營中隊ハ敵ノ奉軍騎兵二十騎余ニ会シ其一騎ヲ斃シ他ヲ追撃シタルニ敵兵及韓兵若干名ト共ニ香州城墻内ニ入りテ頻リニ発火セリ、然ルニ暫時ニシテ退却ヲ始メ平壤方行ニ退却シタル由ニテ我中隊ハ香州府ヲ占領シタリ

九月三日(日曜)、増水した河川のため滞留していた平山を夜明け頃に出発し、九時間半の行軍で葱秀に到着。晴れて暑さも「中等」で行軍しやすい日だった。露營地も前衛部隊の跡を使い、設営が楽だった。

九月三日 晴天

午前五時三十分出發葱秀ニ向テ前進午後三時到着、此日暑氣中等ニシテ行軍ニ頗ル善良、河山辺ニ於テ既ニ前營ノ歩兵隊ガ露營セシ跡ニ於テ露營ス

四日(月曜)さらに義州街道を北進し、行軍九時間で北西二〇キロの瑞興府に到着する。ここでは民家を確保したのでろう、露營ではなく舎營となった。瑞興府の朝鮮人役人である府使が清国軍に通じている、という嫌疑で逮捕している。朝鮮の役人も民衆も、他国の軍隊が故郷を戦場と化そうとしていることに戸惑いや不安、怒りを持っており、日清両国の間で去就に思案していた。

九月四日 晴天 暑氣甚シ

午前七時出發瑞興ニ向テ前進、午後四時到着、舎營ヲナス／此地ノ府使敵ニ通スルノ証跡アルヲ以テ之レヲ捕縛シタリ

五日(火曜)瑞興を出て劍水に向かい、行軍七時間で到着、村落付近で露營となる。この日、先行大隊(一戸大隊)は舎人関、歩兵第一一聯隊(第一大隊欠)は鳳山、旅団主力は劍水に宿営している(第二卷三九頁)。筆者の野砲兵第五中隊は、旅団主力の中にいるのが確認できる。

二日間劍水に滞在し、七日(木曜)朝に出発、行軍七時間で黄州府に到着した。この日も「炎暑」強く、行軍は苦しかった。この日、旅団からの通知で、前衛部隊が三日分の食糧を分捕った、とある。『日清戦史』で、混成第九旅団が三日分の食糧を押収したのは九月五日の鳳山、と記されている(第二卷三九頁)。六日黄州府に入った大島旅団長は、西島歩兵第一一聯隊長に「全旅団十五日分ノ糧食ヲ積ムノ企図ヲ以テ糧米、駄獸ヲ徵発」するよう命じた。大同江渡河準備として、翌七日同聯隊第三中隊が、「端艇蒐集ノ為メ鉄島ニ派遣」された(同四〇頁)。

九月五日 晴天

午前七時出發、劍水駅ニ向テ前進、午後二時到着、村落露營ヲナス

九月六日(注・この日の記述なし)

九月七日 晴天 本朝大霧

午前七時出發、黄州府ニ向テ前進、午後四時到着、路中一大坂路アリテ且ツ炎暑強シ／旅団命令ニ過日我前營牛場比府ヲ占領シタ

ルニ付敵ノ糧食ヲ調査スルニ我旅団ノ人馬三日分ヲ交フルコトヲ得ト

八日(金曜)も「兵力休養」を名目として黄州府に滞在することとなった。実際は、平壤攻略軍全体に食糧不足が続いており、付近の徴発など食糧集めが続いていた。『日清戦史』では「爾後九日ニ至ル迄旅団ハ黄州ニ滞在シ此間同地ニ全師団四日分ノ糧食ヲ徴集シ」ており(第二巻四〇頁)、筆者の記述も、九日まで黄州滞在、となっている。七日に大島旅団長が命じた全旅団一五日分だけでなく、後続の師団全体にゆきわたる四日分というのは過大な要求だったが、ほぼ達成したと思われる。実際に戦闘の開始される一五日までに、このような糧食徴集活動は記録されていない。黄州府あたりから清国軍の来襲なども実際にあり、緊張が強められていく。筆者は敵襲を「清韓連合兵」と記録しており、実際にそうだった可能性はあるが、『日清戦史』にはそのような記述はない。朝鮮政府とは、七月に攻守同盟を結んでいるので、それと異なる朝鮮兵士の動きは公的には認められず、記述しなかったのではないか。

九月八日 晴天

此日兵力休養ノ為メ滞在、此地ハ二面河ニ沿ヒ一面ハ中和ニ至ル道路他ノ一面ハ山岳ナリノ此夜十時四十分我前哨ハ敵襲ヲ受ケ(清韓連合兵)我前營之レヲ撃退セリ、之レガ為メ警戒トシテ歩兵一中隊ヲ増加セシムト、又伝騎ノ言ニ依レバ数多ノ敵松明ヲ点シ右方(地名不詳)ニ迂回シタリト、於之前哨ニ増加兵ヲ加ヘ歩兵第廿一聯隊二ケ中隊ヲ当府東北方ノ山ニ配備セシメタリノ朔寧

支隊ハ三登ヲ経テ元山支隊ハ成川ヲ経テ共ニ平壤ニ向フ筈ナリノ中和府ニ敵ノ一部出沒ス、其力詳カナラズ

九月九日 晴天

此日モ兵力休養ノ為メ滞在

一〇日(日曜)、糧食徴集も終わった旅団は、中和府に向かい出発する。例により夜半に出発し、正午に中和府に到着した。夜半の出発は、動静を秘匿するためだろうが、この日朝は霧が強く広がり、行動が困難だった。中和府は、将校斥候の町口中尉・竹内少尉らの戦死地(八月一〇日)でもあったので、この日追悼式が行われた。

九月十日 晴天

午前二時出発中和府ニ向テ前進正午着、村落露営ヲナスノ本朝大霧タリ、咫尺弁セズ、午後晴ルノ此日朱染店ニハ敵ヲ見サルモ既ニ敵兵露営シタル跡ヲ見ル、此地ニ於テ過ル八月十一日戦死シタル町口歩兵中尉竹内騎兵少尉外兵卒三名通弁二名ノ追悼式ヲ行ハルノ中和方行ニ敵ノ一部出沒セルモ悉ク平壤ニ退却セシ者ノ如シ

一二日(月曜)も「兵力休養」のため中和府に滞在。実際には糧食問題だろう。前夜には来襲もあり、しだいに平壤戦へと緊迫していった。中和府は、平壤より二〇キロほど南方だが、望遠鏡を使えばtentなども見ることができ、「約一万余ノ天幕」を見届けている。

この日野砲兵第五聯隊本部が中和府に到着した(同四三頁)が、筆者は知らなかったようだ。到着は夜だったのかも知れない。

九月十一日 晴天

兵力休養ノ為メ中和府ニ滞在ノ昨夜敵ノ一部襲楊洞ニ於テ二三発

ノ銃声ヲ発スルヲ認ム、此日遠眼鏡ヲ以テ敵ノ幕営ヲ望ム、其数約一万余ノ天幕アルヲ認ム

五 平壤前哨戦

九月一日付師団長訓令に従い、九月二日（火曜）第九旅団は中和府を出発して、再び義州街道を前進する。歩兵第一聯隊（第三大隊は永津浦で師団主力と合流するため、この日の行軍途中で分遣される）、騎兵一箇中隊（一分隊欠）、野砲兵第五聯隊第三中隊（筆者の部隊）、工兵一箇小隊が前衛部隊（司令官西島助義中佐）となった。『日清戦史』では午前五時半の出発と記されるが（四三頁）、筆者の記録では午前二時三〇分とされる。歩兵一箇聯隊に近い規模だから、出発は順次行われ、最後の部隊の出発が午前五時半だったのだろう。

筆者は目的地を「水湾橋」と記すが、実は「永濟橋」だった。『日清戦史』には「永濟橋（二十万分之一図ニハ永濟橋トアリ戦役当時之ヲ誤認シテ水湾橋ト呼ヘリ）」（四三頁）と二行割で注記されている。この間違いは、なぜ起きたのだろう。

『日清戦史』には、都市や村などを街道で結んだ一〇〇万分の一図、七五万分の一図、六〇万分の一図、四〇万分の一図、二〇万分の一図など大縮尺の地図と、二万五〇〇〇分の一図、五〇〇〇分の一図など等高線も入った小縮尺の地図が、二種類「附図」として掲載されているのが不思議だった。小林茂『外邦図―帝国日本のアジア地図』（中公新書、二〇一一年）が、そのなぞを解明した。大縮尺地図は、戦争

以前から陸軍の将校らが公使館員の身分で観測測量した手書き原図を、参謀本部陸地測量部で製図し、開戦後前線部隊に配布されたものが基礎となっている。一八九四年八月には「朝鮮二〇万分一図」、同年一〇月には「清国二〇万分一図」が前線部隊に送られた（同書八〇頁）。これに対し、小縮尺地図は、第一軍・第二軍に随伴した測量班（陸地測量部地形科から派遣。同九三頁）が平板測量で作った二万分の一図（荊蕀版）や、五万分の一図（台湾、一〇一頁）などが作成され、一八九七年から『日清戦史』編纂のための測量班が「成歓附近戦闘図」（二万分の一）、「平壤戦闘前夜日清兩軍之位置図」（五万分の一）、「平壤戦闘図」（二万分の一）、「虎山附近戦闘図」（二万分の一）などを作製したという（同書一〇四頁）。

永濟橋を水湾橋と誤認したのは、地図にそう書いてあったからだが、観測測量という、科学的な測量に基づかない地図だったから誤りが生じたのである。筆者らの前衛部隊は、霧の濃い中を進み、八時間半後永濟橋に着いた。ここは大同江から五、六〇〇里という近さであり、対岸五〇〇〇里の地点から清国軍の八枚野砲がさかんに打ち出されてくる。『日清戦史』では、清国軍の野砲は「約八門」で、時刻は午前九時（第二巻四四頁）。平壤戦の前哨戦が始まった。正午には砲兵隊の拠点が土器店に決められ、護衛として歩兵二箇中隊がつけられた。清国軍の戦闘意欲は強く、時々歩兵・騎兵が渡河して攻撃してくる。夜間もさかんに小銃部隊の発砲が対岸から続いた。この間、分捕砲小隊の山砲二門は、歩兵の援護射撃を行ったが、野砲兵第三大隊は沈黙したままだった。これは「朴可洞北方高地ニ位置セル砲兵第三大

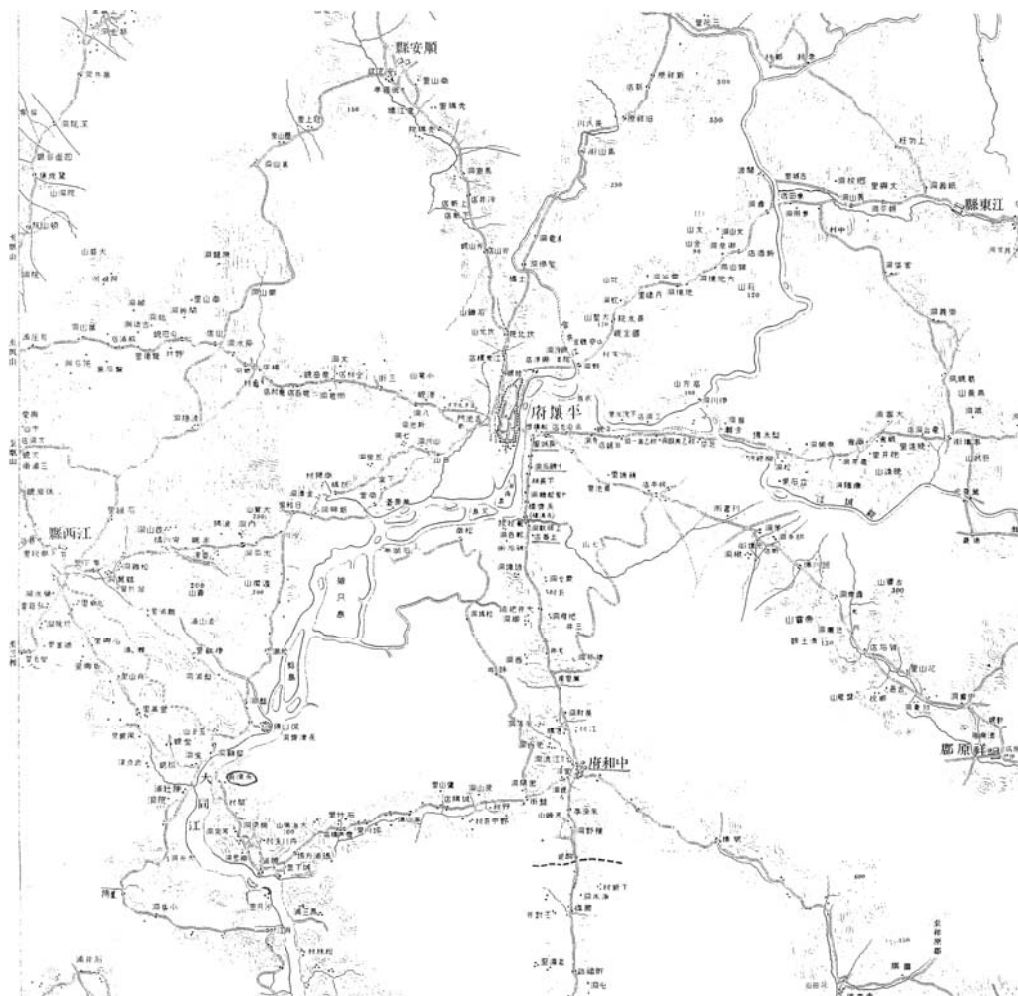


図1 中和府から平壤府へ（参謀本部編『日清戦史』附録第六「平壤戦闘前夜日清両軍之位置図」）

隊ハ是日其位置ヲ敵ニ秘センカ為メ砲火ヲ開カサリキ」（第二巻四七頁）が理由とされる。旅団は、永濟橋手前の高地を占領し、「掩堡及急造肩牆」の築造、つまり砲兵の射撃位置の確保を急いだ。

九月十二日 晴天

午前二時三十分出發シテ水灣橋ニ向テ前進午前十一時着／午前五時ヨリ約一時間ノ内大霧咫尺弁セズ／午前十一時水灣橋ニ達ス、此地大同江ヲ離ル、コト約五六百米突ニシテ既ニ敵ハ堡壘ヲ築キ居タリ、我前營既ニ之レヲ占領セリ、時シモ敵ノ砲兵ハ我ニ對シ熾シニ発砲セリ、我軍ハ茲ニ昼食ヲ終リ參謀官陣地ヲ定メラレタリ、敵砲ハ八珊米野砲ニシテ「ゴーチエー」ヲ以テ測量スルニ其距離五千米突余ナリ／正午我砲兵ハ土器店ニ陣地ヲ定メラル、之レカ護衛トシテ歩兵第二十一聯隊第七八ノ二ケ中隊ナリ、時々敵ノ歩騎兵渡河シ漸時ニ増加スルヲ認ム／我前營騎兵隊ハ敵ノ歩兵約三百余ニ会シ戦闘ヲ開ケリ、我將校用馬匹負傷、既ニシテ之

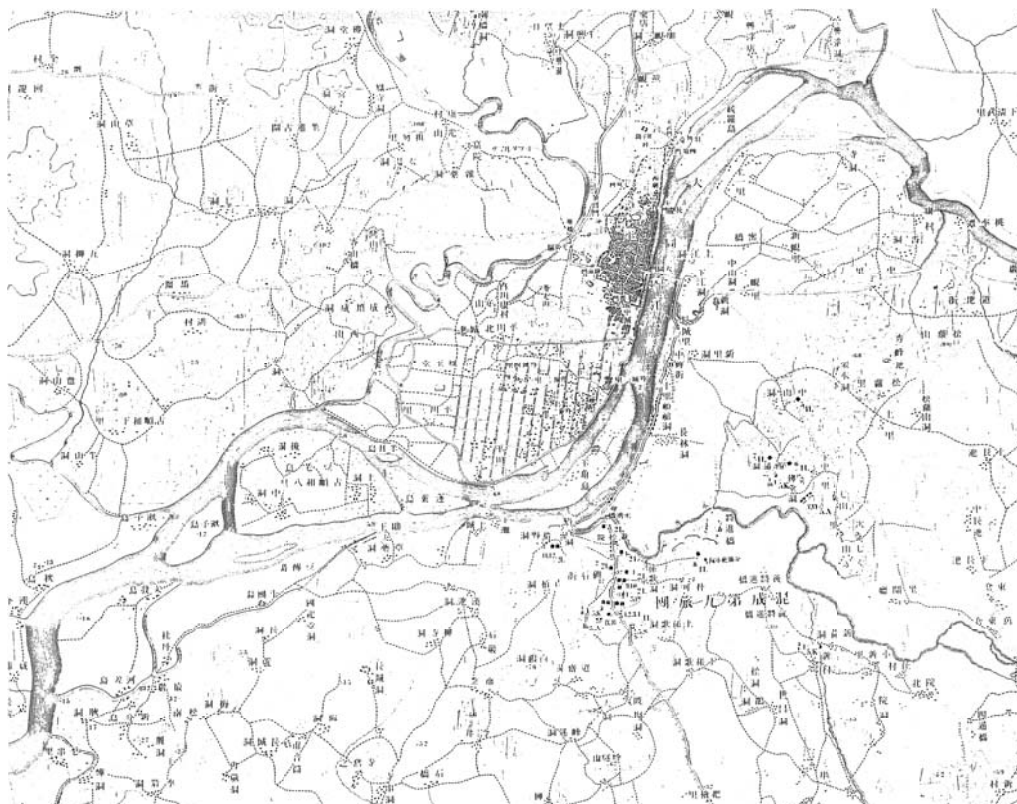


図2 平壤戦の戦闘図（参謀本部編『日清戦史』附録第七「平壤戦闘図（其一）」）

レヲ撃退シタリ／歩兵第十一聯隊ハ小戦闘ヲ成セリ、敵ハ熾シニ砲彈及小銃ヲ発ス／午後四時敵ハ鉄島下流ニ於テ小舟ヲ焚クヲ認ム、其原因下流者ヲ里ヨリ集メ来リシ者ヲ我ニ利用セシメガランガ為メナリ／夜ニ入り敵ハ益盛シニ発銃セリ

砲兵陣地が土器店に決まったのは一二日の正午だったが、夜になっても「急造肩墻」の造築が続いた。これは砲兵を護るために砲の周囲に築く防壁である。一三日（水曜）、旅団の役割は「略々前日ノ陣地ニ在テ専ラ敵ノ注意ヲ此方面ニ牽クニ勉メタリ」（第二卷四八頁）と、主攻撃ではなく、牽制攻撃だった。

この日午前九時、野砲兵第五聯隊第一大隊が到着し、第五聯隊は完結した。第一大隊長四宮信応少佐が、一日日黄州発の師団命令を旅団に伝えた。師団命令は、第九旅団は「平壤ノ前岸ニ接近シ勉メテ敵ノ兵力及注視ヲ貴官ノ方面ニ繫留シ元山、朔寧兩支隊及予ノ運動ヲ容易ナラシム可シ」（第二卷四二頁）と、清国軍の注意を引きつけて、東方からの攻撃を担当する元山・朔寧支隊、後方から回り込む師団主力の行動を容易にするよう指示していた。同訓令では、平壤攻撃は一五日で、師団主力は一日に大同江を十二浦で渡河する、とされた。十二浦は、平壤より南方四十キロ離れた大同江左岸で、師団主力はここから右岸の旗津浦へ渡河して、その後大きく迂回し、平壤を背後から攻撃する計画だった。

ようやく一三日（水曜）の午後四時半から砲兵の射撃が始まった。師団命令による牽制砲撃である、すぐに日が落ちて射撃中止となった。一時間半の射撃で、「榴弾二十発曳火弾七十六発分捕砲小隊五十発」となった。二箇中隊の野砲計八門と分捕砲小隊の二門、合計一〇門の大砲が、合計一四六発撃っている。六六分間に一門あたり一四発、一発四分強の発射になるので多くない。清国軍の砲兵を目標にしていたが、射撃の目的は、敵情視察であつたから、目標を変えつつ時間をかけて射撃している。「曳火弾」は、曳火信管を着けた榴霰弾のことで、着弾地を知るために発射される。殺傷力が劣る曳火弾を多用したのは、殺傷よりも敵状視察が目的だった、という「従軍日誌」の記述を裏付けている。『日清戦史』では、大同江右岸の三ヶ所の堡壘と堤防上の四ヶ所から各二、三門の応射があつた（五一頁）。それでも筆者が、清国軍の砲兵について、数量も所在も全容は把握できなかった、と記しているのは、それ以外の情報が得られなかったからだろう。

九月十三日 晴天

昨夜来我隊ハ急造肩墻ヲ築ク、我砲兵隊ハ左翼隊長西島中佐ノ指揮下ニ属ス／午後四時三十分ヨリ第五第六中隊及分捕砲小隊ノ順序ヲ以テ射撃ヲ始ム、其目標ハ敵ノ砲兵ナリ、我第二砲車ノ砲弾命中スルヤ敵ハ大ニ狼狽シテ悉ク退却セリ、此日ノ射撃ハ敵カ幾個ノ砲車ヲ備ヘ其人員ノ数等ヲ知ランガ為メナル者ノ如シ、故ニ所々目標ヲ変換シテ射撃シタルニ未タ其数及所在悉知能ズ、敵ハ無煙火薬ヲ用ヒ盛シニ発砲セリ、其距離ハ約三千五六百米突ナリ、敵ノ発スル砲弾ハ野砲ナル可シト雖モ一ツトシテ明中セシハ

ナク悉ク遠近若クハ左右ニ落チテ勢無カリシガ僅カ一発ノ砲弾我陣地ニ落チ為メニ第二小隊長一名僅カニ負傷シ各兵ノ志気大ニ振興／午後五時三十六分終射ス、此日費消弾数ハ榴弾二十発曳火弾七十六発分捕砲小隊五十発ナリ／此日終射後大隊長ハ旅団ニ至ル、故ニ一時福田大尉我指揮ヲナス

一四日（木曜）夜明け頃清国軍騎兵の来襲があつたが、歩兵の応戦で撃退する。未明に右翼隊の歩兵第五中隊（第一一聯隊第二大隊）が前進して、西浦洞の高地を占領したので、午前一〇時一〇分、砲兵第六中隊が砲兵陣地を構え、歩兵第五・第六中隊が護衛にあたることになった（第二巻五二頁）。この日の配置は、砲兵第六中隊が西浦洞高地、砲兵第五中隊（筆者の部隊）と分捕砲小隊が朴可洞北方高地（旅団の本陣地）、砲兵第二中隊が貞百洞高地で、これらが一斉に正午から午後二時二〇分まで、まずこの日の第一次砲撃を続けた（第二巻五二頁）。筆者は第一次砲撃を記録しなかったが、清国軍の応射がほとんどなく、旅団の第一次砲撃も中止となったことによると思われる。第五中隊と分捕砲小隊の砲撃目標だった馬字堡壘が「応射二三発ニシテ忽チ隠匿シ」た（同）、とあるのに対応する中止と考えられ、そこで筆者は記述しなかった。

清国軍が砲兵の応射を控え、隠匿したため、大島旅団長は、攻撃正面の馬字堡壘・左字堡壘・平壤外城一里南端堡壘から、兵力の一部が他の方面に転用された、と判断した（同）。実際には転用はなかったが、この判断から翌日の旅団総攻撃が計画される。

応射の質量とともに、大島旅団長らの判断を狂わせたのは、この日

の命令受領だった。大島たち旅団司令部は混乱し、旅団中心の少数兵力による先制攻撃を決意してしまふ。『日清戦史』第二巻五二、五四頁をまとめると、次のような経過だった。

まず午前六時に師団長の電報が届き、師団主力は昨一三日に先頭部隊が保山鎮に達し、この日平壤付近に進出予定、と伝えられる。そこで旅団は、正午から牽制砲撃、翌一五日弘曉羊角島付近から旅団主力の渡河、という計画を打電した。その直後午後二時半に、この日午前三時二〇分保山鎮発師団長訓令が届いた（電報とは書いていないので、伝令騎兵だと思われる）。その内容は、一三日午後四時発旅団計画（旅団は平壤市街南部から攻撃、「成ル可ク師団本隊ノ開戦ヲ待チ之ト合機スルコトヲ勉ム可シ」）に同意、師団本隊の十二浦渡河が渋滞中、明後日平壤に進撃、「旅団ハ此時迄専ラ敵ヲ牽制シ彼ヲシテ其左右及後方ニ於ケル我軍ノ運動ヲ覚知スルノ遑ナカラシム可シ」というもの。『日清戦史』編纂者は、訓令筆記者が錯誤して、総攻撃は「明日」と書くべきところを「明後日」と書いてしまった、と注記している。この訓令を、旅団では総攻撃は一日延期され一六日になったと判断した。無線電信のない時代なので、総攻撃延期情報は朔寧・元山両支隊には届いていないだろう、両支隊は兵力寡少（歩兵五箇大隊、砲兵三中隊、工兵一箇中隊強で三〇〇〇名未満）だから、「孤立シテ苦戦ニ陥ルノ虞アル」、また糧食も不足しているだろう、平壤の清国軍は四万人と予測される、と旅団は考えた。この大軍に、旅団だけでも、予定通り一五日の総攻撃を執行し、「両支隊ノ危急ヲ救ハサル可カラス」、多少の損害はやむを得ない。そう決断した大島旅団長らは、午後三時四〇

分頃、「明日元山支隊若クハ朔寧支隊ノ開戦スル有ラハ旅団ハ独断進出シテ敵ノ本拠ヲ衝クニ至ルコト有ルヘシ」という報告書をまとめた。直後に、立見尚文朔寧支隊長からの伝令が到着。伝令は、同日午前七時三〇分国主岬西麓発の通報を持参していた。支隊は一三日に国主岬と国主店の間に到着し、後続の元山支隊と協同するため一四日は動かず、「明一五日ヲ待タントス」との内容だった。国主岬は平壤東方一〇^キの地点である。朔寧・元山支隊が、当初計画通り一五日総攻撃を予定していると知った旅団長は、「愈々明十五日敵ヲ攻撃スルノ決心ヲ固ウシ」た。旅団はいったんまとめた報告書に、朔寧支隊の通報を添え、「旅団ハ稍々危険ヲ冒スモ両支隊ト共ニ平壤攻略ノ目的ヲ達セントスル」ことを朔寧支隊に答報し、「師団主力ノ先著部隊ヲ以テ我々ノ戦闘ヲ赴援セラレンコトヲ請求ス」と記して、午後四時師団と朔寧支隊に伝えた。

『日清戦史』は二頁半を費やして、混成第九旅団の一五日総攻撃方針維持を説明している。私たちは、これが合理的に必要な説明か、検討すべきである。一五日総攻撃は師団命令だが、攻撃主力は師団が担当し、旅団は平壤正面に位置するものの役割は牽制とされていたのに、旅団は、師団本隊の到着を待たず、一五日弘曉総攻撃を開始し、苦戦となつて、午後〇時半退却命令を出すことになった（第二巻一四二頁）。大島旅団長らは、清国軍を見くびり、旅団の戦功に焦つたのである。朔寧・元山両支隊が危急にある、との判断は、連絡がとれない状況でのもので、一四日の朔寧支隊伝令は約八時間で旅団に届いており、師団と朔寧支隊へも連絡は付いている。また午後四時に朔寧支隊に伝え

た「大島混成旅団長ヨリ立見少将ニ答報」（第二巻附録第二三）の末尾は、

予ハ右ノ決心ヲ以テ明十五日午前八時前後ニハ平壤ニ於テ貴閣下

ト握手シテ 天皇陛下万歳ヲ祝センコトヲ期ス

としめくくっており、払暁開始の戦闘は午前八時頃には終了し、勝利するだろう、と樂觀した予想を示している。一五日総攻撃を四方向からの包囲戦として実施する、という一一日黄州発師団命令は、メッケル直伝の包囲殲滅作戦だったが、大島旅団長と旅団司令部はいわゆる先駆けの功を求めたのである。この背景には、成歎・牙山の勝利という緒戦の自負があったのではないか。

一五日旅団総攻撃という方針の下に、この日も午後四時から一時間四〇分砲射した。合計一六発の砲射はやはり少ない。射撃時間が短いから発射弾数も少なくなる。前日と同じように曳火弾が多いのは、総攻撃を前にした敵情観測という意味と思われる。

兵士たちは、翌日の平壤総攻撃を前にして、意気軒昂だったと、筆者は記す。騎兵の接近や戦闘などは総攻撃の前哨戦として兵士の敵愾心をかき立て、戦闘意欲を増していた。この日夕方、部隊は総攻撃を準備する位置まで前進し、露営する。筆者の砲兵第五中隊は、砲兵第五聯隊本部・砲兵第六中隊とともに永済江右岸に移動し、周辺に露営。歩兵二箇中隊が護衛にあたった（第二巻五五頁）。前衛部隊となる。

九月十四日 晴天

午前六時敵ノ騎兵三十騎余前進シ来ルヲ認め、歩兵之レヲ撃退シタリ／此日午後四時ヨリ敵ニ向テ応射ス、敵亦熾シニ発砲セリ／

此日第六中隊ハ土器店ヲ離ル、コト約千米突ノ所ニ前進シテ敵ニ応射セシカ其効最多シ／午後五時四十分応射セリ、此日ノ費消弾数四十四発曳火弾七十二発ナリ／午後七時ヨリ夜ニ乗シテ前進敵ニ近ク志気益振フ、此時ニ当リ既ニ永々行軍尚敵ニ接スル以来火ヲ点スルコト不能煙火ノ如キモ身ヲ以テ之レヲ覆フガ如シ、然ルニ各兵士等ハ明日ヲ期シ愈敵ニ迫リ決戦セントスルノ義氣天地ニ満チ眉宇ニ溢ル

おわりに

混成第九旅団は、功を焦って師団の到着を待たずに、全力で攻撃を始める。大島旅団長たちには自信があったようだ。筆者の「従軍日誌」にも、兵士の興奮した状態が記されている。旅団司令部の自信が兵士たちにも伝わっていたのだろう。しかし、その自信は攻撃当日崩れる。清国軍の遠距離砲撃や歩兵の新式連発銃などの威力が旅団の進撃を押しとどめ、旅団は後退、退却するのである。その様相は、次号に掲載する予定である。

（はらだ けいいち 歴史文化学科）

二〇一一年十一月十五日受理